

山と博物館

第57巻 第7号 2012年7月25日

市立大町山岳博物館



「平成24年度中部ブロック動物園水族館写生コンクール表彰式風景（H24・6・24）」

絵とは？

羽田 智千代

昭和15年、中学一年生の夏休みに美術科より、自由画制作の課題がでた。

私は極く自然に、「革靴を描こう」と思った。それは従兄から貰ったおがりの編み上げの革靴である。当時我が家の経済状況からすればこの上ない嬉しい贈物だった。用事もないのに、この靴を履いて街中を一周した程だった。

早速、木箱に更紗の風呂敷を掛けた台に片方の靴を置いて、クレパスで描き始め、二時間余りでいつか描き上げてしまった。出来上がった画面は、自分で言うのもおかしいが、まばゆい程に輝いて見え、満ち足りた気持ちで一杯だったのを、70年余り経た今でもはつきりと覚えている。

一学期初めの美術の時間に、勇んで提出した。作品に目を通していた先生は、私の作品をチラッと見て、「何だこれは、片方ではないかと言ったきり不機嫌そうにして、次の作品に目をやった。私は、『片方ではどうしていけないのだ？』という疑問と悔しさが湧いてきて、その後何十年もの間消えることがなかった。

長い年月が流れて、平成4年の12月初めの大町みずえ会（昭和28年に仲間と立ち上げた子どもの絵の会の例会の時のことである。

一年生の男児がスケート靴の片方を刃の部分から上へと描いていき、膝迄いつかに描いて、フッと息をしたかと思うと、筆を置いて満足そうに表情を見せたのである。

これを見た私は50年間も抱き続けていた疑念が霧の如く消えていくのを感じたのである。

この子の描きたかったのは、『靴が自分のものになった喜び』であって、嬉しい思いを靴に託したのである。だから靴が二足揃っているとか、スケート靴を履いて滑っている（スケートはまだ滑った経験はない）等とかではなかったと考えられる。このことは70年前の私の場合よりも重なるのである。

描きたいのは、表面的なモノや形だけではない、構図や表現の裏には作者の気持ちや個性が隠れている。そこに絵の面白さがあるのではないだろうか。

（日本板画院評議員）

北の安曇野の自然と子供たち 自然体験が育むもの

— 美しいもの、未知なるもの、神秘的なものに 目を見張る感性を引き出したい —

倉科 和夫

四季を通して、学校の長短期の休みを利用して、北アルプス山麓大町市八坂にある育てる会の野外活動センター「やまなみ山荘」を訪れる子供たちがいる。その多くは関西、中京、関東からの小学校三〜五年生である。そうした都会つ子との付き合いもかれこれ十数年を数える。

相手が小中学生であれば、この自然体験によつて、子供たちにどんな力が育つていくのか「自問自答しながら、八坂の自然に潜む不思議さをどうやって感じ取ってもらえるかを課題にして少しずつ内容に工夫を加えながら行っている。

その一 知る(知)解(解)の(知)違(違)ひ

一方、参加する子供たちの中には、昆虫などに豊富な知識を持っている者もいる。しかしながら、それらの知識は本から得たものであったり、購入してきたカブトムシを飼育することから得た断片的知識である。だから、ここ八坂での自然観察会に参加した子供たちの欲求はカブトムシが「どんな環境に成育しているのか」や「どこで採集できるのか」といったことに強い関心がある。こうした子供たちとの対話を通して、明らかにした点がいくつかある。

その一 知る(知)解(解)の(知)違(違)ひ

古来より、「知るとは、知識理解を重視する立場、即ち、文章や言葉、数学的表現など、教科書から容易に学べる知識のこと」であり、解るとは「子供たちの感性を重視した立場、体験を通して自らの心に感じとったもの」をいうのである。自然の中で様々な体験をすることは「一般的な知識」とは違い「自分の感性を通して感じ取ることである。日常生活の中でも、体験しないと解らないこと、伝えられないことがたくさんある。

例えば、海水の塩分濃度を約3.5%である」と教科書で読んでも、初めて海に入った時の海水の予想以上塩辛かったことの体験がなければ真に解ったことにはならない。

また、標高が千メートル高くなると気温は6℃下がることを知識として持っていて、自ら登山を体験し、高山特有の冷気に触れなければ解ったことにはならないのではないかと。



入口にある歴史を感じる木製の標識と風雪に耐えぬいた風格ある老松



・チジミササ(イネ科)
山野の林内に生える多年草。
葉縁にはしわがあり、花軸には多くの毛がある。

「雪が融ければなんになるか」と子供たちに問いかけたことがある。多くの子供たちの水になる」という答えが返ってくる中で、一人の女の子が小声で「春になる」と答えた。

こうした答えが出てくる背景には何があるのであろうか。この子は多分冬の寒さ、雪の冷たさ、春の陽ざしの暖かさなど体験を通して、人一倍よく解つていたからであろう。この感受性の豊かさに驚いたことがある。

また、私は自然観察の中で、路傍の草を手にして「この草をよく観察してふさわしい名前付けてもらいたい」という場面をとることにしている。

ある子は茎に白い毛が密集しているのでデブカグサとつけました。別な子は「葉が互生しているのでカイダンケサと付けました」。また小五の女の子は、葉の表面が凸凹しているところ目をつけて「サザナミグサ」とか、小六の男の子は「ハタオリグサ」という。個々の子供たちの持ち前の感性の鋭さを発揮するのに感心させられた。

「この草は葉が縮れていることから「チジミササ」という植物名を教えるのではなく、子供たちの心の奥底に眠っている、その子だけの感性

を呼び覚ましてという試みでもある。

どこにでも見られる路傍の野草に、ある子は過去に海辺で打ち寄せる波の美しさが強く心に刻み込まれていたのであろうか。それが今浜辺に打ち寄せる波を連想させ「サザナミグサ」となったのであろう。

「ハタオリグサ」と名付けた子は、幼い頃に美しい機織された布やおばあちゃんが手織りしている姿を思い浮かべたのであろうか。

こうしたある種の価値を含んだ表現は書物では学べないものである。自然をただ単なる知識として見るか、感性を通して観るかによって大きな違いがあるように思える。

自然観察会で思いがけない動植物との出会いに、子供たちの口から思わず飛び出す言葉「わあーきれいだ」「凄いなあ」「やったー」は個々の子供たちの感性を通して「解った時に発せられるものである」。



ほちゅうのう
コタヌキモの捕虫 嚢を
ルーペで調べる子供たち

その二 古典文学を通して学ぶ感性の世界

感性を通して観た自然描写は古今東西の優れた古典文学によく見られる。こうした書物が時代を超えて読み継がれるのは作者の研ぎ澄まし

れた感性の世界が展開されているからに他ならない。

その本の一文に心引かれて、これまでに訪れた場所がいくつかある。松尾芭蕉の奥の細道の中の東北の名山「月山」もその一つである。

「雲や霧の立ちこめる山気の中を、氷雪を踏んで登ること八里、身はさながら日月の運行する雲の関に入っていくかと怪しまれ、息も絶え絶えに身も凍えきつて、ようやく山頂に達すると、折からの日は沈み、月が現れた。……雲の峰いくつ崩れて月の山……」

盛夏の炎天に空高く立ち上がった雲の峰がいくつ崩れて、この月光に照らし出された雲間に聳え立つ月山になったのであろうか。

私が下山する時も、登山道は深い霧に覆われ深山幽谷の趣一入。期せずして、芭蕉の一文を思い起こしながらの山行きとなったのである。

徳富蘆花の「自然と人生」の中の一文中に作者の溢れんばかりの感性の豊かさを思う。

「野を歩み、霞める空を仰ぎ、草の香を聞き、緩やかなる流水の歌を聴き、撫づるが如き風に向うが中に、忽ち耐えがたき懐かしき感起こり来たるあり。捉えんとすれば、己に痕なし……」と。五感を働かせての野歩き。早春の安曇野を歩くとなぜかこの名文が口をついて出る。自然界は全て感性を磨く場と心得て行うのが観察の本道であろうことを教えてくれる。私もかくありたいと願いこの一文に心引かれる。

もう二十年ぐらいい前のことである。私はボストン近郊のレキシントン・コンコードを訪ねたことがある。それは、有名な著書「ウォールデン・森の生活」を残した詩人であり博物学者のヘンリー・D・ソローの故郷なのである。彼は、

二十八歳の時、ここコンコードのウォールデン湖畔の森の中に自分で丸太小屋を建てて、二年余り自給自足の清貧な生活をした。そして、四季の移ろいを肌で感じ、そこに生息する動植物を克明に観察しながら、思索の日々を過ごし、「森の生活」を残した。

「森へ来て数週間経つ頃になって孤独であることが少々不快になった。ところが雨が降る日に、思索に耽つてみると、楽しい慈愛に富む世界が自然の中にあることを感じた。雨の落ちる音の中にいると、私の家の周り全てが音の中にあることに気づいた。その時名状しがたい無限の親和力が大気のように私を支え、人が近くにいるかどうかはもはや些細なことになってしまった。以来隣人がいる利益などは考えたことがない。小さな松葉も一本一本が拡大膨張して、私に親しいものとなった。……」

かくして、雨の音が自然の奏でる優しい音楽となつて、自己回帰する場所をあたえてくれたのである。彼は自然の中で、あらゆる無駄を省き簡素な生活の中で、人生の真の楽しみや新鮮さを究極の自然体験の中で見出したのである。そしてソローはいう。「歩け、森の中を。歩かない足はやがて身を滅ぼす」と。

車社会の中にと、野の花の可憐な美しさ、小鳥の囀りなどを通して感じることも少なくなっている。「真の幸せは、こうした自然の中での質素な暮らしを大事にすることにある」という価値観が失われた現代に生きる我々に対する警鐘に値する言葉であろう。

その三 レイチエル・カーソンに学ぶ

有名なアメリカの海洋学者レイチエル・カーソンは「センス オブ ワンダー」の中で「子供たちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美

しく、驚きと感激に満ちている。残念なことに、私たちの多くは大人になる前に澄み切った洞察力や美しいもの、畏敬すべきものへの直観力を鈍らせ、ある時は全く失つてしまっている。

もし、私が全ての子供の成長を見守る善良な妖精に話しかける力を持つていたら世界の子供に、生涯消えることのない「センス オブ ワンダー」——神秘さや不思議さに目を見張る感性を授けて欲しいと頼むであろう。この感性が、やがて大人になるとやつて来る倦怠と幻滅、私たちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることに対する変わらぬ解毒剤になるのである。……と述べている。



日本一小さいハッチョウトンボに魅せられる

彼女はガンで亡くなるが、その直前に四歳になる甥ごさんを連れて、嵐の山に出かけるくだりは感動的である。「いま、光茸の輝きの美しさをこの子に見せておかなければ、この子は一生、自然の美しさや不思議さに打たれるという感性を育てることは出来ないだろう。」

彼女は自然体験を通してその美しさや不思議さに触れさせ、それを受け止める感性を幼い時期に育てることが重要なのだと考えたのである。なにより「知ることは感じることの半分も

必要でない」という言葉がそのことを端的に表現している。

その四 五感を生かした自然観察

山野を歩いて自然観察では自己の持つ五感が重要な働きをする。例えば、道端の低木を指差して、子供たちに「これはオオバクロモジというクスノキの仲間の落葉低木だよ」といえば、一応の説明にはなるが、これだけでは知識の切り売りで、聞く子供たちにとっては楽しみがない。

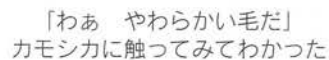
そこで、一枝切り取って、その枝の切り口に鼻を近づけるとなんといいえないレモンのようなよい香りがする。クロモジ油の芳香である。

「この香りを大事にして、今でも和菓子用の楊枝（ようじ）に使われているのだよ」とつけ加えることで、視覚と嗅覚を働かせて、この木が本当にわかるのである。嗅ぐことによって、自然をより身近なものとして捉えることも感性を磨く自然観察の醍醐味であろう。他にも山地の陽あたりの良い林縁にはゴマギがある。「あれ、ゴマそつくりの匂いがする。どうして」といつて驚く。触っただけで特有の臭気があるクサギなど印象深い。

ある子は「サンショウの葉をもつとほしい」という。「お母さんはこの香りがとても好きだから、サンショウの葉を乾燥させて粉末にしてお土産にしたい」と棘のある枝を大事そうに持ち帰った。これもこの子だけがわかる感性の世界であろう。

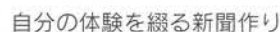
アズサは樹皮や枝を折るとサル酸メチルの強い匂いがする、高山植物のシラタマノキも同様の香りがする。春にはタンコウバイ、ガマズミ、コブシ、タムシバ、ニセアカシヤの花、夏にはクズの花、秋にはカツラ等々香りを放つ

林道の常緑の木の枝を揺るとソヨソヨとなるのでソヨゴという。風が吹くたびに葉がふれあいサラサラとなるヤマナラシや細長い果実が



そこで、先端のまるまった幼い葉を示して、自分の手でこの形をして「らん」というと、幼子の手の形に気づく子も出てくる。そこで「童の手」のような形の草だから「ワラベデ」からワラビという名前が出てきたのだね」というと「昔の人はよく植物を見ていたんだ」としきりに感心する子もいる。そのことがきっかけで、植物名のいわれに興味を持つて質問するようになる。「スギは、マツは、サクラは？」といった按配である。

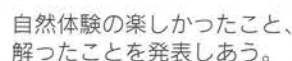
その行為は自分の体験を自分の言葉で相手に伝えることであり、自己の感性を磨くことにつながるからである。



ボストンの「こども博物館」のスローガンにこんな言葉が記されている。

聞いたことはすぐ忘れる
見たことは覚えている
体験したことでわかった

これを座右の銘として、こどもたちと共に大自
然の不思議を求めて山野を巡りたいものである。



訂正とお詫び

本誌第57巻第6号の「正岡企画展「スイス山岳観光の黄金期」と日本人」その魅力と文化を伝えた人々「展覧資料解説」に、後の調査による「指摘などを含め、次の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

〔註〕 ヴァレー地方のレッチエンタール(レッチエン谷)周辺の
村の鍛冶職人

〔正〕ベルナーオーバーラント地方のリュツチエンタール
〔リュツチエン〕谷の鍛冶職人

③頁一段、22頁目

〔正〕アウクスト・キスリンク作
〔③頁2段23・24行目〕

〔正〕ペーター・ルビ作〔中略〕ルビはマイリンゲンの袋物職人

④頁3段の行目
誤 英國留子中の昭和元年夏之正 英國留子中の大正十五年夏

山と博物館 第57巻 第7号

発行 千 長野県大町市大町八〇五六―一
98-0002

市立大町山岳博物館
TEL 〇二六二二二〇二二

FAX 026-221-1111
E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp

印刷(株)奥村印刷
URL: <http://www.city.omachinagano.jp/sanpaku>

定価 年額 一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）